

○ 「朔旦冬至」＝旧暦の11月1日（新月）と冬至が重なる日

平成26（2014）年度の冬至は、19年に一度の特別な冬至
太陽と月の周期（約365日と約29.5日）は当然違っているの、毎年重なるわけではない。

古来、冬至は極限まで弱まった太陽が復活する日、すなわち「復活の日」とされてきた。太陽の復活の日「冬至」と、月の復活の日「新月」が重なる朔旦冬至は、非常におめでたい日だとされ、古来朝廷では盛大な祝宴を催した。

具体的には、天皇が紫宸殿に出御して祝い、後日、新嘗祭（現在は11／23）の翌日、豊の明かりの節会で、朔旦叙位、恩赦を行った。

しかも、2014年の次の『朔旦冬至』は、19年後ではなく38年後の2052年になる。
これは、「旧暦2033年問題」によるもので、こんな事態が起こるのも1844年に天保暦が制定されてから189年で、初めてのこと。

（※旧暦2033年問題は、旧暦の月名が、天保暦の暦法で決定できなくなる問題なのだが、ここでは詳しくは触れないので、興味のある生徒は調べてみて。）

いずれにせよ、非常に rare で、めめたい年度に遭遇したということ。

日本以外でも、冬至（あるいは、冬至から翌日にかけて、冬至の直後など）には、世界各地で冬至祭が祝われてきた。北欧のクリスマスも、起源は冬至祭（ユール※）であったりと、おめでたい日。

※ ユール（北欧語: Jul、英語: Yule）

古代ヨーロッパのゲルマン民族、ヴァイキングの間で、冬至の頃に行われた祭りのこと。後に、キリスト教との混交が行われたが、北欧諸国では現在でもクリスマスのことをユールと呼ぶ。英語でもユールタイド（Yuletide）と呼び、クリスマスの祝祭自体を指す言葉となったが、現在は古語とされている。北欧のユールには、キリスト教伝来以前の習慣と結びついた、独自の様々な習慣がみられる。

「クリムゾン・タイド」（Crimson Tide）は、1995年の原潜映画。「深紅の潮流」。

○ センター試験まで、今日を入れずに8日間。

1・2年生も、1・2年後には・・・。

自分自身を信じ切ること、これに尽きる。

12月にも紹介した江戸時代の儒学者、佐藤一斎の言葉。

「一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂ふこと勿れ、ただ一燈を頼め。」

たとえ小さな光でも、大きな闇ではなく光に目を向けるべし。

その小さな光を信じて歩み続けよ。

一燈の光＝志、希望、夢、愛、

自己の堅忍不拔の向上心（講談社学術文庫訳者）

堅忍不拔（我慢強く堪え忍び、心を動かさないこと。）

・ 自分自身を信じて、今できることを一つずつこなしていく、この繰り返し

・ 目指す大学のキャンパスで学んでいる姿をイメージして、

自分自身を信じ切ること、これに尽きる。それを支える「健康な体」

<インフル、ノロウィルス、RSウィルス(気管支) 注意>

<参考>

『クリムゾン・キングの宮殿』(In The Court Of The Crimson King)

1969年に発表されたキング・クリムゾンのファースト・アルバム。

プログレッシブ・ロックというジャンルを確立した記念碑的な作品、その後のロック史にも多大な影響を与えた。

レコーディング・メンバー

ロバート・フリップ - Guitar

グレッグ・レイク - Lead Vocal & Bass

イアン・マクドナルド - Keyboard,

マイケル・ジャイルズ - Drums,

ピート・シンフィールド - Words and illumination, lyrics